3市町からは、安全に住むだけでなくコミュニティの持続も視野に入れることが必要であること、楽しく暮らす発想を持つことで事前復興計画に対する考え方が変わることが発言された。

最後に、事前と事後では状況が異なり事前はまちの将来への意見を丁寧に聞き取れること、集落や地区での意思決定のあり方を確認しておくこと、被災後には被災者以外は計画に対して発言しにくくなることが発言された。

［三宅諭／岩手大学］

建築文化週間2021開催報告（本部企画）

主催：日本建築学会

建築夜楽校2021
シンポジウム「脱成長時代の建築・建築家論―ポストコロナ時代の建築」

「脱成長時代の建築・建築家論」と題して、10月1日（金）にオンラインにてシンポジウムを開催した。当初は、建築会館ホールでの観覧とリアルタイム動画配信の併用を予定していたものの、台風の接近に伴い、急遽開催方法が変更となったが、計398名の参加があった。

地球環境の劣悪化に伴い、脱成長は現在流行りの思想テーマとなっている。今回のシンポジウムでは、講演者に北山恒氏（awn／法政大学客員教授／横浜国立大学名誉教授）、中野佳裕氏（早稲田大学地域・地域間研究機構次席研究員）、秋吉浩気氏（VUILD代表取締役CEO）を招き、環境問題とは切り離すことのできない建築と脱成長の関連について議論を展開した。その内容は環境問題にとどまらず、脱成長経済が豊かなコミュニティモデルを形成することなどにも波及し、多角的な意見が飛び交った。

シンポジウムの前半には、3名の講演者が各20分間のプレゼンテーションを行い、後半では講演内容をもとにディスカッションを行った。講演者は「脱成長時代の建築・建築家論―ポストコロナ時代の建築」というテーマでプレゼンテーションを行ったが、各々の異なる専門性によって多様な見解が俎上に上がった。

北山氏は、過去の都市を参照しながら、現代の我々の住む都市空間がいかに歪なものかを明らかにした。日本でいえば1873年に地租改正条例により土地の所有が開始されたことで、明治以前と以後の地図のあり方が大きく変化する。明治以後の地図では敷地の区分けが明瞭化されることで、土地の所有が明らかとなる。海外に目を移しても、シカゴ大火の復興計画などによって郊外に目が向けられるようになり、現代都市の原型ともよべるものが形作られていく。この流れによって、20世紀につくられたものは資本主義の都市である。19世紀のパリが王政の都市だとすれば、資本主義の都市を代表する20世紀のニューヨークは対比的である。この資本主義の都市を、空間構造によって人間を資本主義的に訓練する都市であると北山氏は述べる。この状況が加速した結果、1960年代からGDPの増加と幸福度の逆転現象が起こる。これに対し、北山氏は現代的な新たな都市像が求められるという。そのため北山氏は、ニコラス・ジョン・ハブラーケンのオープン・ビルディングにヒントを得て、ヴォイド・インフラという空地を主題としたプロジェクトを立ち上げ、自然、共同体、個人の統合を目指している。

続く中野氏は、脱成長を文化的側面と絡めてプレゼンテーションを行った。プラネタリーヘルスという医学誌『The Lancet』に発表されたマニフェストによると、Well-Beingを保つために、地球の健康を捉える必要がある。文化的側面のなかには経済的な状況が包含される。もともと消費を意味する「Consumption」の語源である「Consume」は、中世には破壊を意味する言葉であった。その言葉が経済的な用語となったのは近年のことであり、今日では市場のものを使い切ることを意味している。この使い切るという行為こそ、ハンナ・アーレントが言う共通世界の破壊である。現代において、消費が人間のニーズを超え暴走しているが、これはむしろ、もともとの「Consume」の意味合いに近づいている。Well-Beingの低下を消費によって補おうとすることで、消費は加速度的に膨大なものとなる。我々は世界をケアするためにもこのサイクルから抜け出す必要があり、その実現のために社会関係資本をつくるコミュニティやコモンズが重要となり、ローカリゼーションの実践を通して、脱成長を実現していく必要があるだろうと中野氏は訴える。

秋吉氏は、建築の民主化を通して脱成長社会の実現に取り組まれている。エルンスト・フリードリッヒ・シューマッハが、科学技術の方法や道具を一般に広く普及させることが民主化につながると述べたように、現代社会ではデジタル・ファブリケーションという誰でも比較的容易にアクセスできる道具がある。500万円で木材加工機であるCNCルーターが買える時代だからこそ、森林資源などの材料が豊富な地域にこの機材を導入することによって、材料を自らの経済圏の内側で消費することが可能となる。小学生でも地元の木材を使い家具製作などができるという状況そのものがWell-Beingの実現につながり、人々の自立的な力を醸成していくことが秋吉氏の活動の根源となっている。このデジタル・ファブリケーションの仕組みを用いて、VUILDでは住宅生産にも乗り出している。この住宅が技術的な側面のみでなく、人が住むという根源的なところにどこまで新しい答えを出しているのかをもっと伺いたかった。中野氏が、現代住宅はDwellingからHousingになっていると指摘したが、秋吉氏はDwellingを自らの巣作りと読み解くことにより、これがDwellingであるという主張がなされた。住宅完成後の住み方、生き方に対しての応えを今後の氏の建築に期待したい。

ディスカッションでは、生業という言葉がキーワードとなった。中野氏の生家が七代続く和菓子屋であったことが、特定の地域との

シンポジウムの様子（Zoom）

コモンズの形成に大きく関わっていたことや、秋吉氏の取り組みのように、資源が地域内で調達可能となることにより地元の大工や林業従事者の活用につながることは、これからの脱成長社会を考えるうえで重要なヒントとなった。

［山本至／ itaru/taku/COL. 共同主宰］

建築文化考 2021
シンポジウム「都市の・そのさき」

第5回となる本シンポジウムでは、私たちが生きる「都市の・そのさき」と題し、10月5日（火）に建築会館ホールおよびYouTubeによるリアルタイム動画配信にて開催した。参加者は計285名（うち動画配信275名）であった。

今、私たちを取り巻く都市という形式そのものが揺らぎ始めている。東京を中心とした都市人口は、世界でも特に高い集中化が進行しており、成熟化と同時に、様々なリスクや弊害を引き起こしている。新たな感染症は、都市に住まう私たちの日常をも変え、都市に住まうことそのものの矛盾を突きつけることとなった。このような予期せぬリスクや急激な変化が生み出され続ける新たな日常におかれた私たちは、都市に対する新たな視座を獲得しうるのだろうか。今まさに問われているこの課題について、まず初めに関野宏行氏（佐藤総合計画取締役）より解説があった。

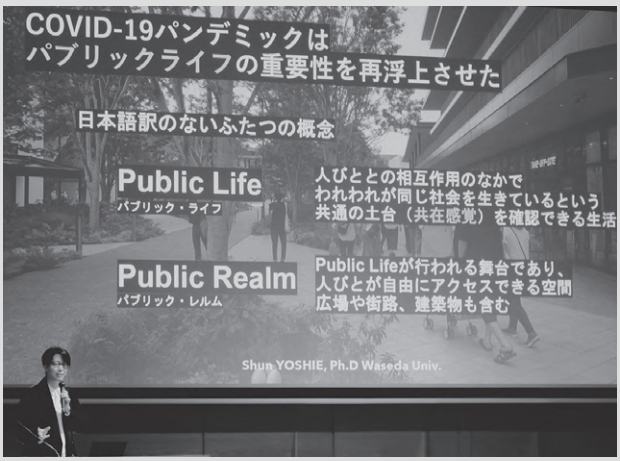
続いて、パネリストに吉見俊哉氏（東京大学教授）、吉村有司氏（東京大学先端科学技術研究センター特任准教授）、吉江俊氏（早稲田大学講師）の3名を招き、シンポジウムの前半では、各パネリストから変化しつつある日常の渦中で考えていることや、都市の「そのさき」にある萌芽についてご講演いただき、後半では、ディスカッションを行った。

吉見氏は、戦後復興・五輪・東京の未来を俯瞰し、“より愉しく、よりしなやかに、より末永く”を掲げ、東京の持続性に何が必要かについて言及した。

2021年の五輪を「復興五輪の結末、何を間違えていたのか」と題して振り返り、万博などの歴史を俯瞰したうえで、成長主義的な礎となった1964年の東京五輪などを契機とする東京一極集中の都市像の危うさを指摘した。一方で、石川栄耀の環境・文化を核とした戦災復興構想など、東京集中ではない分散型都市の未来像が浮かんでは潰えていった時代の変遷に触れながら、今回の五輪を復興五輪として位置付けるならば、本来しなければならなかったことは、かつての東京五輪で失われた川の風景や路面電車、繊細な街並み、地方とのバランスなどを復活させる「循環型成熟社会」の復興であり、それこそが我々が向かっていくべき方向ではないかと力説し、都市の速度を減速する必要性を説いた。

また、東京の様々な文化的基層をもつ都心北側地域を対象に、「東京文化資源区構想」と名付け、歩行者と同じ速度感で経験できるスローモビリティを街の新たなインターフェイスとして復活させることや、世界的なムーブメントである首都高の撤去による分断された地域の再接続についてなど、高速化からスローへという新たな時間軸の挿入による再価値化を、文化圏構想として提起した。

コンピュータサイエンスをバックグラウンドにもつ建築家・吉村氏は、建築・都市におけるAIとビッグデータの可能性について自身の経験をもとに解説し、スペインをはじめとした海外の公的機関



会場風景

に所属しながら、AIを活用していかに市民生活の質を向上させるかをテーマとした20年間の活動について、「まちづくりにとって科学とは何か」を問いながら紹介した。

今までは、計画者のイマジネーションが空間を創造してきたが、現在はテクノロジーの進化によって、私たちのアクティビティそのものをデータとして収集できる時代に突入している。吉村氏はその価値を強調し、頭の中で想定するしかなかったアクティビティをビッグデータとして収集・想定し、サイエンティフィックに分析することが可能な時代になったことを詳説された。“機械の目”から見た定量化された視点を通じて、建築や都市の新たな見方として街並みの美に客観性を生み出す試みを紹介し、ランキングなどで市民自身が都市美を考える契機づくりの重要性を強調した。

加えて、ボトムアップ型・市民参加型まちづくりにも可能性を拡げる、バルセロナの“熟議を促すデジタルプラットフォーム”こと「DECIDIM」を例に挙げ、デジタルテクノロジーを用いることで、大きくなり過ぎた都市に対して民主主義というシステムのアップデートが可能であることを、バルセロナの政策決定に使われた例を挙げて解説された。また、データサイエンティフィックなアプローチの可能性から、市民参加の可能性とプライバシーの問題を補完する「DECODE」の説明があり、俯瞰的に見ることにより、集まって住むことの価値の再考が新しい民主主義につながると締めくくった。

都市論・都市計画論の研究者である吉江氏は、「<第四の場所>と<迂回する計画>―都市研究の前線」を題材とした。吉江氏は、新型コロナウイルス感染症によって、直接人と会う研究スタイルの変更を余儀なくされたが、フィールドサーベイを通して、都市空間がなぜ必要であるかを問い直す契機となったと語る。様々な屋外空間を観察することで、新型コロナウイルス感染症によってパブリックライフの重要性と社会性を再確認できる場所が再浮上したと語り、路上や屋外の小さな空間で思い思いの行為をする「第四の場所」が浮上したことが示唆された。

また、“盛り場の反転、引き潮”“場所と行為に対する独特の感情”などの観察で得られた知見によって、さらにそのさきにある空間利用の文化の成熟を説いた。加えて、高度経済成長期を経て21世紀初頭までつづく、行政主導による都市の拡大から官民共同による都市再生の時代への変遷を“第二の都市化”と見立て、都市計画に対する戦略が変わっていったと吉江氏は分析する。民間企業の利益に還元できる、役立つこと＝コモンズの規範を拡げることで、民間主導の公共的な空間づくりが、回りまわって持続的な企業の利益につながるという「迂回する経済」と名付けた戦略を軸に、都市のそのさきが見い出されるのでないかと論じた。具体例として、食空間のもつ公共性とキャンパス空間と地形の関係について言及し、その幅広い研究と実践の一端を覗かせた。

ディスカッションでは、吉村氏と吉江氏のこれからの都市に対する様々なアイデアに対して、吉見氏が応答するような形で議論した。共通していたのは、“反転、裏返し”をキーワードに見る方向や見方を変え、都市が積み重ねてきた文化的地層を自らの足で確認し、目で見て経験することの価値、また、そのさきにこそ都市に対する新たな方向性が生み出されるということであった。

さらに吉見氏は、新しい民主主義や未来の都市像に対して、前提となる哲学の重要性を説き、吉江氏は、様々な都市をはかる指標に秩序を与えるものとして哲学を語った。

司会を務めた加藤からの、都市の規模が変数として重要ではないかといった問い掛けに対して、吉村氏は、デジタルによって規模を問う必要がなくなる一方で、顔が見えるコミュニティの価値について言及した。また、吉江氏はバルセロナのディスカッションに着目しながら、匿名性から都市規模について述べられ、吉村氏からは、個人データの扱いを含んだプライバシーに関して、「DECODE」で分散型の管理を行うバルセロナの先進性についての応答と解説があった。加えて、都市規模と歩行空間について、吉見氏は“地形”が、吉江氏は“歴史的な読解”が歩行体験の拡張につながることを強調した。

「都市の・そのさき」というテーマがくしくも浮かび上がらせたものは、新たなテクノロジーや視点の導入が、身の回りから民主主義までを再考させ新たな体験を促すことであり、また、自らの足で都市を観察・経験することの身体性である。その規模を新しく再編成する視点に新たな可能性があり、その大切さを改めて共有化できたシンポジウムとなった。

［加藤詞史／加藤建築設計事務所主宰
牛込具之／佐藤総合計画第二オフィスシニアアーキテクト］

パラレル・セッションズ2021
トークイベント・展示「Learning from Architecture―Parallel Projections Archive 2016／2021」

今年のパラレル・セッションズは、10月1日（金）より特設Webサイト「Parallel Projections Archives」（http://bunka.aij.or.jp/para-projections/）を公開し、10月16日（土）にトークイベント「Learning from Architecture」を開催した。参加者は計277名であった。

この事業は、本会創立130周年にあたる2016年に特別企画として開催された「パラレル・プロジェクションズ」の派生企画で、若手の建築実践者の議論の場をつくるという目的で始まった。参加者の主体性を考慮してエントリー制とした結果、初年度は130名を超えるエントリーがあり、事業の継続の声をうけ、枠組みや仕組みを少しずつアジャストしながら、2017～2019年にわたって開催してきた。当初から5年で一区切りと位置づけていたこの事業は、2020年がコロナ禍の影響により建築文化週間自体が開催中止となったため、2021年に持ち越しとなり、このコロナ禍の状況をどう前向きに捉えるかを考えた結果、2021年はオンラインイベントによるアーカイブ化を進めることとした。

これまでのセッションや参加者情報をまとめていたWebサイト「パラレル・プロジェクションズ・プラットフォーム」のデザインと一部仕様を変え、アーカイブ化に特化した特設Webサイトへと改修した。そのうえで、これまでの33のセッションを振り返りつつ、アーカイブとしての厚みをもたせるために、エントリーした217組から62組にテキストの寄稿を、22組にインタビューを依頼し、それぞれ過去の振り返りとそこから見える現在地をアウトプットしていただいた。

それらの内容は、10月1日（金）の特設Webサイトの公開以降、順次アーカイブに追加された。テキストは特設Webサイト上で閲覧することができ、12時間におよぶインタビューはYoutube上へ

トークイベントの様子（Zoom）

公開している（2021年12月現在）。

テキストの寄稿については、これまで実施した33のセッションの参加者（各セッション1～2名）に、現在の状況や思考の変化を踏まえつつ、改めて当時の問い（セッションテーマ）に対する応答のテキストを執筆いただいた。2020年に発生した新型コロナウイルス感染症の世界的流行は、それまでとは異なる現実を私たちに突き付け、暮らし方や考え方の再考を迫った。一つの空間に身を寄せ合って議論したパラレル・セッションズの風景は、もはやはるか昔、あるいは別世界（まさにパラレル・ワールド）の出来事のように感じられる。ゆえに応答文は、単なるセッションの内容紹介にとどまらず、コロナ禍以後の世界にあって、問いそのものが今でも有効なのか、あるいは当時の考えやプロジェクトがどう変容したかを教えてくれるものとなっている。

インタビューについては、10月16日（土）の9:00～21:00までの12時間、22組のゲストを招き、パラレル・プロジェクションズからの5年間をアーカイブする一日をコンセプトとしたトークライブ「Learning from Architecture」と題し、オンラインで開催した。1組あたり30分ずつの持ち時間で、イベント参加当時の感想から現在の活動報告まで、幅広く議論された。参加者のバックグラウンドも、当時はアトリエ事務所のスタッフだった参加者が現在は独立していたり、組織設計事務所に籍を置いていた参加者が個人でも活動するようになったり、あるいは継続して大学での研究職に就いていたりと、この5年での変化を感じさせるものだった。

一方で、議論の内容もさることながら、このイベントを機会にして、多くの関係と協働が生まれたという事実が最も重要な意義だと感じている。10年後、20年後にこのアーカイブの価値がなお積み上がるように、参加者の今後のさらなる活躍を期待したい。

最後に、このような継続イベントをしっかり終わらせる、というのは経験上、とても難しいことだと思う。昨今、当初の存在意義を失い、すっかり変容したにもかかわらず、続けることだけが目的化してしまっている事業や取り組みが多々存在する。限られたリソースを有効に活用するためにも、ある一定の役割を終えた事業はアーカイブ化し、終わらせる勇気や決断が必要ではないだろうか。本事業はそこまで大規模な事業ではなかったが、しっかりとアーカイブを残し、企画を終わらせるという事例をつくることができた。この事実は多くの人に参考にしてもらいたい。最後に、6年間という時間のなかで関わってくださったすべての皆様に改めて御礼申し上げたい。どうもありがとうございました。

［辻琢磨／403architecture［dajiba］共同主宰、川勝真一／RAD共同主宰］

カルチベートトーク2021
トークイベント「なぜ建築とデザインを分けるのか」

今年のカルチベートトークは、10月27日（水）に建築会館ホールとYouTubeによるリアルタイム動画配信にて開催した。当初は建築会館ホールでの観覧のみを予定していたが、配信を希望する声をうけて、急遽配信も併用した。日本を代表するプロダクトデザイナー・深澤直人氏をお招きし、今年6月に竣工した自邸アトリエのプロジェクトを通して、「なぜ建築とデザインを分けるのか」というテーマでご講演いただいた。また、深澤氏に加え、その建築を担当した藤晴香氏（竹中工務店東京本店設計部）、深澤氏との親交が深く住宅史にも造詣が深い松隈章氏（聴竹居倶楽部代表理事）を迎え、モデレーターは建築文化事業委員会委員の濱野裕司が務めた。

講演では、このプロジェクトを振り返りながら、分業化が進む現代においてものづくりの原点に立ち戻り、建築とデザインの境界を取り除いたインテグレーションによる創発について、深澤氏と藤氏により合同で作成されたスライド資料を視聴しつつ、様々な話が展開された。

自邸アトリエをデザインするにあたり、子供時代に繰り返し描いていたという、「幸せの原風景」（円弧状の地面の上に切妻の家があり、その隣にはオレンジの実のなる木が描かれたスケッチ）に着想を得たと深澤氏は述べる。建物には、深澤氏自身によってデザインされた、カトラリー、椅子、テーブル、照明、水栓、トイレ、

会場風景

バスタブなど、あらゆるものが内包され、建築そのものにおいても、窓、ポスト、石垣、構造や設備までのすべてが、深澤氏の意思とこだわりによってデザインコントロールされている。

著名建築家のル・コルビュジエやフランク・ロイド・ライト、日本でも吉田五十八や村野藤吾など、昔の建築家はその世界を実現するために、建築から家具や照明まですべてのデザインを行っていたが、現在では様々なスペシャリストが集まるチームでの設計が主流となり、一人の建築家が指揮をとったとしても、自らがすべてを手掛けることは少なくなってきた。だが、今回の深澤氏の自邸アトリエは、氏の美学や想いが外観からディテールに至るまですべてに詰め込まれている。

塀や門扉などの隔てのない外構のデザインについては、歩行者に対して高い天空率を確保し、石垣で囲われた基壇上に、歩行者のアイレベルに広がる庭を計画することで、建物前に広がる豊かな周辺環境を「借景」という形で享受しながら、自身も「借景」となることを目指したという、都市スケールでの視点も語られた。

環境との調和を目指し、カテゴライズされた職業分野の垣根を越えたプロフェッショナルなソリューションが随所に求められる現代において、ボーダレスに活躍する深澤氏からの「あなたは自分が一番良いと思うものを明確に答えられますか？ それを寸分の狂いもない線で引けますか？」という問いかけに対して、計385名の参加者（うち動画配信353名）とともに、「建築とデザイン」について思考をめぐらせる貴重な機会となった。

［濱野裕司／竹中工務店東京本店設計部長］

学生ワークショップ2021

ワークショップ「君とRe:design ～家具から都市までの再編～」

本企画は、建築文化週間の一環として、全国の大学から建築学生が集まり、企画段階から学生が主体となって毎年異なるイベントを運営するものである。

今年は全国各地から11大学の学生が実行委員として集まり、「君とRe：design ～家具から都市までの再編～」と題して、コロナ禍によって変容した社会の課題を見つけ、その解決案の提案をコンペティション形式で競うワークショップを、10月23日（土）、24日（日）にオンラインにて開催した。また、全国の参加学生をオンラインでつなぎ、Zoomのブレイクアウトルームを利用した4つのオンライン会場に分けて、会場ごとに家具・建築・都市という3つのスケールに着目した提案を行った。なお、今年はオンラインでの開催であることを踏まえ、10月2日（土）と9日（土）に事前ワークショップを行い、早い段階からチームでのディスカッションを行うことで、より密度の濃い提案を目指した。

DAY1（10月23日）

事前のアンケートにもとづいて、43名の学生は大学や学年をシャッフルしたうえで、A～Dの4つのオンライン会場に分かれた。さらに、それぞれの会場のなかで家具・建築・都市スケールの3グループに分かれて議論を行った。各オンライン会場でテーマを決めて発表準備を行ったが、その進行具合は会場ごとに様々であり、より良い提案を目指すために、時間外のミーティングや作業を行ったグループも多く、オンラインで行うことによる自由度をフル活用できていたように感じた。

DAY2（10月24日）

1日目に引き続き、2日目の午前は各オンライン会場での作業および発表準備とし、午後からは審査会を行った。審査員には、建築分野から五十嵐淳氏（五十嵐淳建築設計代表）、武藤隆氏（大同大学教授）、医療分野から長崎由紀子氏（愛知医科大学准教授）をお招きし、各オンライン会場の発表に対してご講評いただいた。審査会では質疑応答の時間を十分に設けたため、各オンライン会場の提案に深く切り込むことができた。

オンライン会場Aは、「隙間」をコンセプトに、ライブ会場を対象に提案を行った。コロナ禍という状況に対して密の回避に着目することで、コロナ禍で生じた制限に正面から向き合った点は評価されたものの、五十嵐氏からは、ライブ会場までの道のりや会場内での利用を制限するのではなく、学生らしい可能性の感じられる提案を見せてほしかったとの指摘があった。

オンライン会場Bでは、「会いたい人と会う」をコンセプトに、日本で最も人の往来が多い渋谷駅ハチ公前広場およびスクランブル交差点における、密の分散を促す提案を行った。これに対して、計画地へのチャレンジ性や発想が評価されたが、一方で、五十嵐氏、長崎氏からは、バリアフリーへの配慮不足や、より非現実的な提案の方が面白くなるという指摘があった。

オンライン会場Cは、「公園での人の集まり」をコンセプトに、参加者それぞれにゆかりのある公園を対象地として設定し、グリッドを各スケールにおける共通要素とした公園の提案を行った。しかし、五十嵐氏からは、この提案によって公園をより閉鎖的にしてしまっているという指摘をうけ、武藤氏からは、グリッドがこの提案をより難しくしてしまったのではないかという意見があった。

オンライン会場Dでは、「光を媒介としたコミュニケーションスペース」をコンセプトに、「傘」と「照明」を組み合わせたツールによって、非接触型のコミュニケーションのきっかけとなる提案を行った。武藤氏からは、日本におけるコミュニティ形成の難しさの問題が指摘されたものの、未来を感じられる前向きなヴィジョンも見えたことが高評価につながった。

こうした審査の結果、最優秀賞はオンライン会場Dが、優秀賞はオンライン会場Bが受賞し、併せて、審査員賞とZoomおよびTwitterを用いた一般投票賞を決定した。審査会を経て、短い作業時間で提案をまとめることの難しさを痛感した学生も少なからずいたが、コロナ禍をともに経験した同志として、いまの生活に何が足りないのか、未来に向けて何ができるのかを考えるよいきっかけとなった。

最後に、このような貴重な機会をくださった建築文化事業委員会、ご支援くださった協賛企業各社、審査員の五十嵐淳氏、武藤隆氏、長崎由紀子氏の皆様にこの場を借りて御礼申し上げる。また、結果として延べ43名という多くの学生が13大学および建築塾から参加した。ご参加いただいた方々に、今一度記して感謝申し上げる。

事前ワークショップの様子

最優秀賞：オンライン会場 D「光を媒介としたコミュニケーションスペース」

集合写真

最優秀賞　オンライン会場 D

不破光梨（金沢工業大学大学院）／森下かん奈、山下夏鈴（工学院大学大学院）／中田きらり、森田奈那（静岡文化芸術大学）／三部玲子、吉川未来（東京電機大学大学院）／石黒大喜（前田建築塾）／山口琴未（安田女子大学）／比嘉志緒里（琉球大学）

優秀賞　オンライン会場 B

竹中樹、永井博章（金沢工業大学大学院）／松岡桜子（京都大学大学院）／小柳凪紗、高橋真以（工学院大学大学院）／島屋拓海（静岡文化芸術大学）／池田瀬時（東京電機大学大学院）

審査員賞

五十嵐淳賞　　オンライン会場 D 建築スケール
武藤隆賞　　オンライン会場 D 家具スケール
長崎由紀子賞　オンライン会場 B 建築スケール

一般投票賞

オンライン会場 D 家具スケール
オンライン会場 B 建築スケール
オンライン会場 D 都市スケール

<実行委員>

代表：永井博章（金沢工業大学大学院）／副代表：三部玲子（東京電機大学大学院）、松岡桜子（京都大学大学院）／岡嵜大和、国松真子、平賀美希、藤原綾乃（愛知産業大学）／小口紋炉、坂口真一、竹中樹、不破光梨、茂木達彦（金沢工業大学大学院）／林浩平（京都大学）／伊藤彩結、遠藤あかり、竹内有咲、富田留衣、早川萌里（金城学院大学）／黒田尚幹、小柳凪紗、島田遥菜、高橋真以、森下かん奈、山下夏鈴（工学院大学大学院）／四宮幸之助、鹿圭登、手柴智佳（佐賀大学大学院）／佐野仁美、篠田泰成、島屋拓海、中田きらり、堀江輝彦、森田奈那（静岡文化芸術大学）／千葉大騎（静岡理工科大学大学院）／池田瀬時、岡本衛、宮本竣也、吉川未来（東京電機大学大学院）／矢吹はるひ（広島工業大学）／三藏南華、吉川知編、比嘉志緒里（琉球大学大学院、琉球大学）［計11大学42名］

［学生ワークショップ2021実行委員会委員 愛知産業大学3年
岡嵜大和、国松真子、藤原綾乃］

学生グランプリ2021
公開審査「銀茶会の茶席」

昨年は新型コロナウイルス感染症の流行により開催を中止したが、今回も感染拡大の影響により、入選作品は従来の原寸大ではなく、制作に要する時間の削減が見込まれる1/2サイズにスケールダウンして制作し、銀座三越では入選4作品すべてを展示する方式に変更して開催した。

今年の応募数は41作品であり、8月11日（水）に建築会館ホールにて開催された第一次審査会では応募作品の所属・応募者名はブラインドのうえ審査を行い、第二次審査に進む入選4作品ならびに各々審査員賞1作品を選考した。なお、本コンペティションは模型制作を伴うため、制作時の学生の感染防止が課題であり、模型制作の可否や開催方法の変更をぎりぎりまで見極めるべく、第一次審査会の結果の公表は例年より後ろ倒しし、審査自体を非公開にて実施した。

8月末の状況をもとに、1/2サイズとする前述の開催方針を決定し、審査結果は9月初旬に公表した。9月13日（月）には1/2模型制作説明会を行い、建築文化事業委員会委員および銀茶会関係者によって構造エスキスチェックおよび茶席のレクチャーが行われた。

第一次審査結果

入選　1/2模型制作

No.9　　煌粒庵
　相川文成ほか2名　　日本大学大学院

No.15　巡る。
　穀野直貴ほか3名　　千葉工業大学

No.24　精彩
　中村太一ほか3名　　東京大学／慶應義塾大学

No.29　儚空
　森田倫郎ほか4名　　東京理科大学大学院／東京理科大学

［審査員賞］

濱野裕司賞

No.3　　竹海月
　濱上結樹ほか2名　　九州大学大学院

本阿彌守光賞

No.9　　煌粒庵
　相川文成ほか2名　　日本大学大学院

佐藤淳賞

No.10　結
　ファン・ボラムほか4名　文化学園大学

坂口裕美賞

No.15　巡る。
　穀野直貴ほか3名　　千葉工業大学

鵜飼哲矢賞

No.16　盲亀の浮雲
　山田誠人ほか3名　　広島大学大学院／広島大学

安田俊也賞

No.19　一寸の浮遊
　福島岳大ほか4名　　広島大学大学院／広島大学

山本豊津賞

No.24　精彩
　中村太一ほか3名　　東京大学／慶應義塾大学

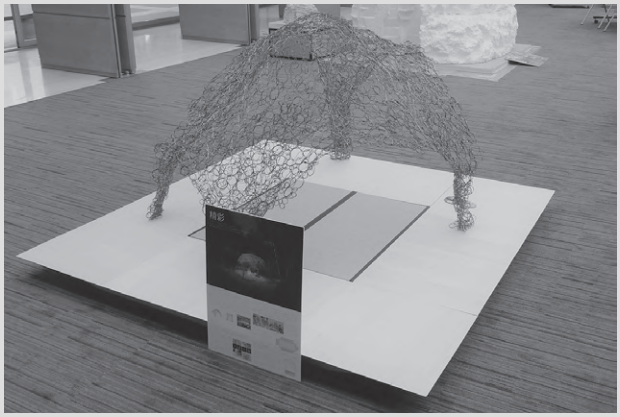
風間喜一、木村知弘賞

No.30　菱繋庵
　小山田駿志ほか4名　　日本大学大学院／日本大学

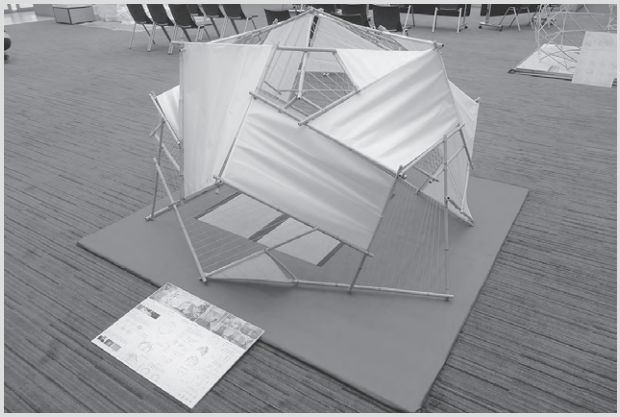
原田裕季子賞

No.37　水庵―水紋が交わる静寂のひと時―
　山戸善伸ほか4名　　日本大学大学院／日本大学

第二次審査会は10月3日（日）に建築会館ホールにて開催した。第一次審査を通過した4作品は1/2模型を応募学生自らが所属する大学にて予め制作したうえでホールへ搬入し、公開審査をもって最優秀賞、優秀賞を決定した。なお、当初は建築会館ホールでの公開審査を予定していたが、感染拡大防止のため、一般の観覧はリアルタイム動画配信による視聴のみとした。最優秀賞作品「精彩」ならびに優秀賞作品と入選2作品の1/2模型は、全銀座会主催による「銀茶会」にて、10月28日（木）～11月1日（月）の間、銀座三越で展示された。

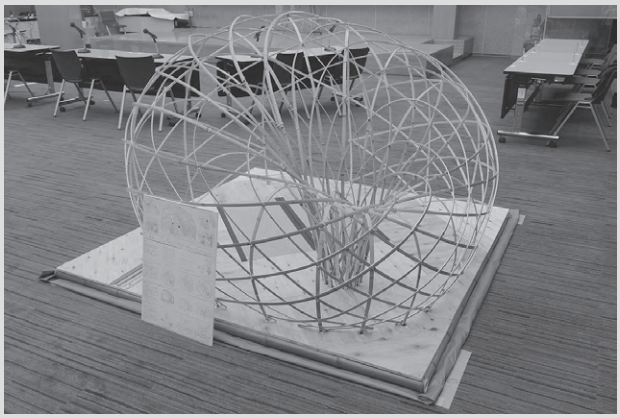


最優秀賞：精彩



優秀賞：儚空

入選：煌粒庵



入選：巡る。

第二次審査結果

最優秀賞

No.24　精彩

　中村太一ほか3名　　東京大学／慶應義塾大学

優秀賞

No.29　儚空

　森田倫郎ほか4名　　東京理科大学大学院／東京理科大学

入　選

No.9　煌粒庵

　相川文成ほか2名　　日本大学大学院

No.15　巡る。

　穀野直貴ほか3名　　千葉工業大学

［鵜飼哲矢／九州大学教授］

トウキョウ建築まち歩き2021

見学会「上野・谷中」

今年は10月9日（土）に開催し、13:00に上野公園「西郷隆盛像」を出発した。参加者は計25名であった。3回目の緊急事態宣言が解除されたのが9月30日（木）だったが、開催前日の東京都の新規感染者数は135人。予断を許さない状況だった。感染防止対策として、検温・消毒やマスク着用の呼びかけなどを当日に行ったほか、インカムの使用が密集を避けることに役立った。

今回は、前半が上野公園、後半が上野桜木・谷中と、それぞれ趣も見どころも異なるふたつのエリアを歩いた。

上野公園と通称される都立上野恩賜公園は、武蔵野台地につながる上野台の南端部に位置する。不忍池、上野動物園が含まれ、東京国立博物館をはじめとする多くの文化施設が立地している。主だったものだけを挙げても、世界遺産の国立西洋美術館（1959年）、東京文化会館（1961年）、東京国立博物館の建築群（表慶館／1908年、本館／1938年、東洋館／1968年、法隆寺宝物館／1999年）、旧東京音楽学校奏楽堂（1890年）、国立国際子ども図書館となった旧帝国図書館（1906年）等々、見るべき建築が目白押しで、詳しく見て歩くには1日ではとても足りない。それぞれについては各自で改めて訪れていただくとして、今回は外からの見学にとどめ、背景となる歴史や、風景の変遷に注目して歩くことにした。

上野公園の中心軸は、北側の東京国立博物館から延びる南北軸線だ。竹の台広場と呼ばれる平場には、軸線上に大噴水とイベント広場、その両側にカフェ（いずれも2012年に現在の形に整備）が配置されている。よく知られているように、上野公園のほぼ全域は江戸初期の徳川家光の時代から200年以上にわたって寛永寺（1625／寛永2年開創、本坊落成）の寺領が広がっていた。現在の東京国立博物館の位置に本坊があり、大噴水の辺りに根本中堂（1698／元禄11年）が、ふたつのカフェの辺りには、左右に法華堂と常行堂（ともに1627／寛永4年）が高廊下でつながれて建っていた。これらの建物は上野戦争（1868／明治元年）に伴う火災で失われているが、江戸の主軸線はそのまま現在に映し出されている。

近年の公園整備では、軸線上のビスタを重視する計画が進められている。中でも注目されるのが、南北の軸線と交差するJR上野駅公園口から上野動物園表門に至る東西軸線だ。駅前を通る車道の一部を廃止して上野駅公園口広場（2021年）がつくられ、JR上野駅も公園口改札を東京文化会館と国立西洋美術館を左右に見る公園口広場の前に移設した。公園口広場からの軸線を受け止める動物園の表門も新たな形で改築されている（まち歩き実施時は施工中）。

桜並木の上に建つ清水観音堂（1631／寛永8年、1694／元禄7年に根本中堂の建設に際して現在の場所に移設）は、数少ない江戸時代初期の寛永寺の遺構であり、その舞台から見る不忍池と辯天堂は江戸の風景である。

上野桜木と谷中は、江戸時代以前からの寺院と、寛永寺の寺領、明暦大火後の寺地移転などで、多くの寺院と墓地、門前の町家からなる寺町が形成されていた。震災や戦災の被害をほとんど受けず、大規模な再開発もなかったこともあって、歴史的なまちなみが残されていた。その後、所有者の世代交代などで徐々に更

東西軸線、上野動物園方向を見る

谷中・よみせ通りを歩く

写真撮影：加藤詞史

ガイドマップ（参加者に配布したハンドブックより抜粋）

新され、価値のある建物が失われていくなかで、保存活動が積極的に行われてきた。大正から昭和初期の建物をリノベーションした、カヤバ珈琲（2009年）や、上野桜木あたり（2015年）は、NPO法人たいとう歴史都市研究会（2001年設立）による活動の成果である。それに先立って1984年に創刊された『地域雑誌 谷中・根津・千駄木』（〜2009年）は、地域情報と地域の歴史の聞き取りを収録したもので、谷根千ブームの先駆けとなったものといわれる。

この地域はまた、1993年に銭湯を改装したギャラリースペース「SCAI THE BATHHOUSE」が生まれ、1997年からアートイベント「アートリンク上野―谷中」が開催されるなど、アートとの結びつきが強い。背景としては、岡倉天心をはじめ東京藝術大学の関係者が住居やアトリエを構えたこと、そして多くの藝大生が下宿していたことがある。朝倉彫塑館として公開されている彫刻家・朝倉文夫のアトリエと住居（1935年）もそのひとつ。HAGISO（2013年）は藝大生の下宿だった築58年のアパートをリノベーションしたものだ。

今回のまち歩きは当初、谷中銀座入口の「夕やけだんだん」までを巡る予定だったが、16:00前に朝倉彫塑館の前に辿り着いたため、そこで解散とした。参加者の皆様に、朝倉彫塑館の屋上のオリーブの枝越しの風景を眺めていただきたかったからである。

なお、当日に配布したハンドブックに掲載の行程と年表は、本企画の特設Webサイト（http://bunka.aij.or.jp/machiaruki/）で公開しているのでぜひご覧いただきたい。

［大森晃彦／建築メディア研究所代表］

講演会の様子

見学会の様子

写真撮影：西澤岳夫

建築文化週間2021開催報告（支部企画）

主催：日本建築学会

●北海道支部

講演会・見学会「小樽の建築 魅力再発見」

日本建築学会北海道支部では、これまで歴史意匠専門委員会が中心となって、継続的に歴史的建造物の見学会を実施してきた。10年ぶりの小樽開催となる本年は、小樽の近代建築が地域資源としてより身近にあることを体感いただけるよう、見学会より前に講演会を行うこととした。開催日は10月16日（土）で、参加者数は後援関係者を含め29名（定員25名）であった。

前半の講演会では文化庁文化財鑑査官・豊城浩行氏をお招きし、「文化財建造物の保存について」と題してご講演いただいた。迫俊哉氏（小樽市長）の挨拶ではじまった講演会は、豊城氏が昭和60年代に小樽で携わった旧日本郵船小樽支店の保存修理工事にまつわる思い出話を導入に、これからのまちづくりに関する話へと順次進行していった。まず、最近の事例紹介を通して、重要文化財の指定が灯台や橋梁を含めた近現代建築中心へ移行している状況が示され、小樽がまさに文化財の宝庫であるとの指摘があった。次いで、登録文化財（建造物）制度、歴史文化基本構想や文化財保護法の改正など、文化財保護行政の動向に関わる解説があり、事例を通しながら保存活用の手法や留意点について説明があった。これからのまちづくりについては、景観法や歴史まちづくり法を活用しながら地域の核となる文化財をしっかり固めたうえで、その周辺を守っていくのが小樽の進むべき道であると説き、そのためにも建築士会や日本建築学会などの専門家を交えつつ、様々な人々と協力し合うことが重要であると強調した。終わりに、文化財は地域の活性化に役立つものであり、文化財を地域の歴史、文化を示すものとして捉え、地域の住民を巻き込みながら「住んでいる人が喜べる」まちづくりをしてほしいと話を結んだ。

質問時間では、寒冷地における文化財との付き合い方に関する問い掛けに対し、「大切なところを残すことを考えた改造・改善であれば許される。何を残してゆくか皆で十分話し合い説明できることが重要で、地元の暮らしに合うように改善しなければならない。我慢して使うのは活用ではない」と返した。最後に、会場からのリクエストに応えるかたちで参加学生に向けて応援メッセージが送られ、林秀樹氏（小樽市教育委員会教育長）の挨拶で講演会の幕が閉じた。なお、講演会の司会は北海道支部歴史意匠専門委員会の羽深久夫委員（札幌市立大学名誉教授）が務めた。

後半の見学会では、解説を北海道支部歴史意匠専門委員会の駒木定正委員（北海道職業能力開発大学校特別顧問）が担当した。見学対象は、講演会場として利用した市立小樽美術館・小樽文学館（旧郵政省小樽地方貯金局）、松田ビル（旧三井物産小樽支店）、アンワインドホテル（旧越中屋ホテル）の3つであり、

すべて昭和初期に建設された近代建築である。旧郵政省小樽地方貯金局（1952年）は、当時木造が主流だった地方貯金局庁舎が、鉄筋コンクリート造で建設された最初期の事例として知られている。戦後の近代建築が市民の文化活動の拠点として再生された好例であり、一般開放している館内や中庭のほか、版画家・一原有徳が貯金局職員時代にアトリエとして使用していた地下の一室も特別に見ることができた。松田ビル（1937年）は、センターコアを採用した機能性に優れた事務所建築で、アールデコ調の照明やエレベーターの意匠など、見どころの多い建築である。通常は非公開であるところを、今回は同ホールと2階の一室を見学することができた。最後の見学先であるアンワインドホテル（1931年）では、エントランスホールとダイニングルームの軽快で幾何学的な照明やステンドグラスに、参加者一堂が目を奪われていた。旧越中屋ホテルは外国人を対象とした高級ホテルとして建てられた建築であり、外国貿易港として早くから発展した小樽の歴史を理解するうえで大変貴重な建築である。所有者が幾度も変わり、一時期は取壊しの危機もあったが、今も当初の用途のまま使い続けられている建築であり、保存と活用が両立している。

見学会の解説を担当した駒木氏は、建築単体の魅力もさることながら、まちの歴史のなかにおいて、どのようなストーリーが建築の背後に隠れているのかを理解することが大切であると説き、加えて、近代建築の保存のためには活用が欠かせないと訴えた。そして、近代に建てられた建築が数多く残る小樽は、まさに歴史的建造物の宝庫であると改めてアピールし、会を締めくくった。

当日は天候にも恵まれ、歴史的建造物の保存と活用について改めて気付きを与えてくれる、大変有意義な一日となった。最後に、ご講演くださいました豊城浩行氏、本企画にご後援いただきました小樽市教育委員会、そして講演会ならびに見学会の準備と運営にご協力くださいました、市立小樽美術館・小樽文学館、松田ビル、アンワインドホテルの皆様に、記して感謝申し上げます。

［西澤岳夫／釧路工業高等専門学校准教授］

第46回「北海道建築賞（2021年度）」表彰式・記念講演会

第46回北海道建築賞の表彰式・記念講演会が、10月22日（金）夕刻より北海道大学工学部建築都市スタジオ棟において開催された。当日の会場には建築業界関係者をはじめ、大学関係者、学生、一般市民を含め40名ほどが集まり、親密な雰囲気のなかで行われた。表彰式は、北海道建築賞として「北海道大学医学部百年記念館」（小澤丈夫君／北海道大学）、北海道建築奨励賞として「伊達の家」（青木弘司君／ AAOAA一級建築士事務所）と「株式会社遠藤建築アトリエ新社屋」（遠藤謙一良君／遠藤建築アトリエ）が発表され、各受賞者に表彰状と副賞のブロンズ彫刻が手渡された。その後、北海道建築賞委員会主査の加藤より審査経緯・結果および審査講評について報告した。

本賞は、1975（昭和50）年の第1回以来、その年の応募作品の中から本賞にふさわしい作品を選定してきた歴史があるが、昨年はコロナ禍の状況のため、現地審査を安全な状況で行うことができないと判断し、残念ながら作品の募集を見送った。本年度の審査は、募集は予定通りに行いつつ、状況によっては中止とする場合もあることを念頭において慎重に進めた。応募のあった21作品について、例年通り「先進性」「規範性」「洗練度」を基本的な評価軸としつつ、書類審査によって選ばれた6作品の現地審査を経て、北海道建築賞1作品、北海道建築奨励賞2作品を決定した。この間、クライアントや設計者のご協力により安全な現地審査を行うことができたこと、また、長い時間をかけた活発な議論の末に得た結果であることが報告された。

「北海道大学医学部百年記念館」は、道内産木材を用いた汎用的な部材と構法によって大屋根による広がりのある空間がつくられた。公共空間における木材活用の先駆的な作品であり、デザインと構造が統合された完成度の高さが評価された。また、建築周辺との関係を丁寧に計画することで、キャンパス内にシンボリックな場所をつくり出したことも評価された。

「伊達の家」は、外装材と断熱材の間に存在する空気層を拡大した中間領域をつくることで、入れ子状の平断面計画がつくられた。中間領域の温熱環境が不安定なことなどが危惧されていたが、竣工後2年ほど経ち、住まい手が楽しんで空間を使いこなしている状況を確認できた。断熱気密を優先した厚い外皮による寒冷地建築の考え方に対して、新たな可能性を提示していることが評価された。

「株式会社遠藤建築アトリエ新社屋」は、市街地における2階建て自社オフィスにおいて、設計者が追求してきた木材架構、環境技術などの要素技術を組み合わせることで、寒冷地における小規模オフィスのあり方を示しており、意欲的かつ実用的な試みが達成されていることが評価された

以上の表彰式に続いて受賞者による記念講演会が行われ、小澤丈夫君から「北海道大学医学部百年記念館」の設計について、青木弘司君から「伊達の家」の設計について、遠藤謙一良君から「株式会社遠藤建築アトリエ新社屋」の設計についての講演がなされた。ここでは各設計者の作品に対する考え方や設計プロセス、具体的な詳細、さらに、それぞれの設計者の建築的なバックボーンなど多岐にわたる内容のプレゼンテーションによって、各作品についての理解を深めることができた。

続いて行われた記念パネルディスカッションでは、委員会メンバーが司会・進行を務め、設計者と対話する形で進められた。プレゼンテーションの内容をベースとした深い議論が展開され、作品に対する理解を深めるとともに北海道の建築の歴史とこれからを俯

パネルディスカッションの様子

写真撮影：加藤誠

瞰するイメージを得ることができた。現代は、建築をつくる際に選択可能な手法や手段、様々なマテリアルやマニュアルなどにあふれた時代であり、これら膨大な選択肢のなかに溺れないように芯の通った考えを提示していくことが大切である。受賞された3つの作品は、それぞれが確かな視点で問題に向き合うことで、独自の明快なメッセージをもった解決手段が示されており、これからの建築のあり方を感じることができた記念パネルディスカッションであった。

［加藤誠／北海道建築賞委員会主査］

ワークショップ「くしろ防災屋台村」

新型コロナウイルス感染症の拡大防止のため、開催中止とした。

●東北支部

第31回「東北建築作品発表会」

10月9日（土）に、オンライン（Zoom）にて第31回東北建築作品発表会が開催された。本発表会は、東北建築賞作品賞応募者に作品についてプレゼンテーションをしていただくものであり、作品賞の1次審査を兼ねるとともに、本会と地域社会との交流の推進、建築関係者の研鑽ならびに東北地方の地域特性に立脚した建築作品の探求を目的としている。本年度は小規模建築物部門16作品、一般建築部門24作品の計40作品であった。発表会においては、まず石田壽一支部長より挨拶があり、その後、増田聡選考委員長により発表にあたっての注意事項が説明された。その後の発表では、1作品につき質疑応答含む7分の短い持ち時間であったものの、設計者から作品のコンセプトやアピールポイントについて充実したプレゼンテーションが行われた。質疑応答も1分という短い時間ではあったが、活発な議論がなされ、活気のある発表会となった。

参加者は151名で盛会であった。今回はオンラインでの開催となったが、事前の準備と参加者の協力によって滞りなく実施することができたと考えている。次年度以降の開催形式がどのような形になるかは不透明であるが、今回の経験は一つの貴重なオプションになるものと期待される。今後も開催方式に関わらず、関係団体・大学などを通じた積極的な案内を行い、より活気のある発表の場にするよう努めていきたい。

また、第31回東北建築作品発表会で発表された40作品と前回受賞した第40回東北建築賞作品賞が掲載されている『東北建築作品集2021』を刊行した。いずれも、近年の東北地方における建築活動の一端を示す貴重な建築作品であり、東北地方の建築にとっての共通課題の探求につながるものである。

［西脇智哉／東北大学准教授、東北支部社会文化担当常議員］

●関東支部

構造デザインフォーラム2021（第26回）

「『建築と構造が融合したデザイン』を再考する」

日本建築学会関東支部構造専門研究委員会（設計WG）主催の構造デザインフォーラムが、11月6日（土）15:00～18:00に行われた。今年度の本企画は、「『建築と構造が融合したデザイン』を再考する」をテーマとして、建築（意匠）と技術（構造）の融合が空間にどのように貢献してきたかという視点で、荒木美香氏（荒木美香構造設計事務所）、喜多村淳氏（太陽工業）、田尾玄秀氏（縦建築事務所）、中村伸氏（日本設計）の4名にご講演いただいた。全体の進行をモデレーターの斎藤公男氏（日本大学名誉教授）が行い、司会を山我信秀（NTTファシリティーズ／設計WG主査）が行った。参加者数は、75名（社会人51名、学生24名）と多くの方々にご参加いただき、建築と構造の融合についての関心の高さが感じられた。

・ 丘の礼拝堂／荒木美香氏

荒木氏より、丘の礼拝堂の設計・施工の内容についてご紹介いただいた。建築と構造は夫婦のような関係であり、自分の分野のみ考えていればよい訳ではなく、お互いに相手の領域についての意見を積極的に伝え、相手が考えていることを汲み取ることが必要であると荒木氏は述べた。木々が連なりながら軽やかに浮いているイメージに対して、平面10m×10m、高さ約8mの直方体に、樹状の構造体ユニットをフラクタルに積層することを提案している。建築家との打合せに模型を用いて、構造体の安定性を体感してもらい、構造が成立するために必要な部材を理解してもらいながら設計を進めていたのが印象的であった。

・ LUCERNE FESTIVAL ARK NOVA ／喜多村淳氏

喜多村氏より、東日本大震災からの復興を願う目的で計画された移動式空気膜構造についてご紹介いただいた。被災地を巡回する祈りと音楽の場を提供する仮設建築物である。これまで実現されてきた空気膜構造とは異なる形態となっており、構造的に合理的ではない大きな穴が設けられているのが特徴的であった。その穴回りに応力が集中するが、膜材を2重膜とし、かつ帯状膜により補強をすることで対応していた。今回実現した建物を一つの建築作品としてではなく、今後の空気膜構造の仮設建築に応用できる普遍的な技術としたいという強い意志をもって、設計に取り組んでいることを感じ取れた。

・ 空間の素材について／田尾玄秀氏

田尾氏より、東急池上線旗の台駅と竹田市立図書館を空間の素材というテーマでご紹介いただいた。旗の台駅は、既存駅舎の老朽化および利用人数増加に伴う建替え計画であった。電車の運行や駅施設の利用を維持しながら建替え工事を実施する必要があり、既存上家を残したまま、その上部に新しい屋根をかける計画である。狭小な敷地で施工ヤードが狭いことと、終電から始発までの短い作業時間での作業効率を考慮し、軽量かつ一人でも取り扱い可能な105角の製材の定尺材を用いていた。また、小径材とすることで、空間的に軽やかな印象を与えていた。屋根の架構は、105mm正角材を300mm間隔で並べた支点桁架構と方杖により構成され、継手仕口は在来軸組工法用プレカットを用いて、木質構造用ねじで緊結するシンプルな接合としていた。

・ NIPPO本社ビル／中村伸氏

中村氏より、プレストレストコンクリート造により計画されたNIPPO本社ビルをご紹介いただいた。中村氏が今まで設計した事例の説明があり、どの建築物からも、耐震要素を建築計画に溶け

パネルディスカッションの様子

講演者による模型解説の様子

込ませた設計に建築と構造の融合が感じられた。構造設計者という立場であるが、計画地に足を運び、立地特性より感じた印象から構造計画を立案していた。視線制御などが必要な面には、心柱となる耐震壁を配置して耐震性を確保し、眺望を期待できる面は梁せいを絞って開放感が増す架構を提案している。プレストレストコンクリートのメリットである型枠の転用を模倣して模型を作成し、イメージを設計者や施主と共有していた。

・ パネルディスカッション

講演者４名にモデレーターの斎藤氏を加え、質疑応答を主体としたパネルディスカッションを行った。参加者からは、部材のスケールの選定や素材の選び方などについて質問があった。パネルディスカッションの後に、関連企画として11月4日（木）～11日（木）に建築博物館ギャラリーで開催された「アーキニアリング・デザイン展」に移動し、展示物である模型やパネルを用いて、講演者が解説と質疑応答を行った。会場では質問が少なかったが、模型を用いた説明により講演者を囲んで活発な質疑・意見交換が交わされた。講演内容がより理解しやすくなったことで、学生から実務者まで多くの方々に興味をもっていただき、闊達なディスカッションができた。

［山我信秀／関東支部構造専門研究委員会設計WG主査］

●東海支部

見学会等の開催を予定していたが、今年は開催を中止とした。

●北陸支部

第２回 地域再生・活性化の建築力
シンポジウム「これからのこども園を考える」

人口減少・少子高齢化時代に入り、これからの日本で生活する多くの人々にとって、地域の再生・活性化は大きな課題となっている。そこでも核となるのは人であり、建築は人々の生活を支える基盤である。今回は、未来につながる人を育む「こども園」をテーマにシンポジウムを開催した。２名の講演者の保育施設の設計を通して、これまでの取り組みやこれから必要となる建築など、地域と建築の持つチカラについて考えた。

シンポジウムでは司会者から趣旨説明を簡潔に述べた後、２名の講演者から保育施設の設計作品の話題をご提供いただいた。小山賢哉氏（象設計集団）からは、「認定こども園めごたま、天神保育園、うらら保育園、ひらお保育園、喜多見バオバブ保育園」などの設計事例を話題に挙げていただきながら、保育施設の設計には「場所の表現・大きな家・さまざまな場所・自然とともに・はだし」という５つのキーワードが大切であることをお話しいただいた。青木一実氏（atelier-fos）からは、「木もれ陽保育園、ささべ認定こども園」などの設計事例を話題に挙げていただきながら、「子どもと地域との関係、子どもの石を邪魔しない大人の環境づくり」についてお話しいただいた。

その後、コーディネーターを中心に講演者たちと意見交換を行い、お互いの発表を聞いたうえで質問の掛け合いや、共通のテーマによる議論などを行った。そのテーマの一つである「設計のアプローチの仕方（土地の捉え方）」では、「地域を歩くこと、地域との関係づくり、スケール感、外と中との連続性、地域に開く可能性を探ること」などについての議論が行われた。

最後には参加者からも４～５件の質疑が出るなど、参加した全員が保育施設のことを考えられた良い場となった。今回のシンポジウムにおいて、全体を通して挙がっていたキーワードは「地域」である。その言葉自体は新しいものではないが、地域との関係づくりに設計者がより深く関わってその仕組みを提案できるかが、これからの保育施設に求められるのではないかと感じた。

［西本雅人／福井大学講師］

とやまたてもの探偵団2021
見学会「立山にまつわる建築巡礼」

新型コロナウイルス感染症の拡大防止のため、開催中止とした。

第10回 越前・若狭の建築文化探訪
見学会「国指定重要文化財大安寺の保存修理」

福井支所では、10月2日（土）に「越前・若狭の建築文化探訪」を開催した。毎年、建築文化週間事業として企画・開催しており、記念すべき第10回目を迎えた。今回は、「国指定重要文化財大安寺の保存修理」と題して、広く参加者を募り、福井県内外の建築に興味がある方を対象に見学会を行った。福井市田ノ谷町にある大安寺は、福井藩四代藩主が開いた臨済宗妙心寺派寺院であり、方丈形の江戸時代前期の本堂をはじめ、壮観な伽藍が良好に残っているとして国指定重要文化財になっている。大安寺は現在、文化財の解体・保存・修理を行っている。

見学会の様子

今回の見学会は、コロナ禍の最中であったため、定員を限定しての募集となったが、満員となる15名の参加があった。現地では、大安寺副住職・髙橋玄峰氏をはじめ、修理を監理する文化財建造物保存技術協会、現場を担当する松浦建設の方々の全面的なご協力により、スムーズな開催となった。

当日は、大安寺に初めて訪れる参加者も多かったことから、まずは、枯木堂にて、大安寺の歴史や諸堂、今回の修理「大安禅寺・令和の大修理」の経緯について説明があった。続いて、開基堂にて開基の松平光通公の業績や関連する意匠の説明と、開山堂の案内があった。

その後、全員ヘルメットを被り、修理の覆屋と足場のかかる本堂へ進んだ。本堂は解体修理の時しか見ることができない屋根の外れた状態であり、軒先に位置する高さの足場からの木組みや屋根内部の様子、様々な痕跡などを間近に見ることができ、部材の説明などがあった。次に内部へと進み、壁や柱など今回の修理方法や現在の実施状況と、福井県名産の笏谷石の使用状況や経年劣化について、地面に近い部分の腐朽の状況やそれに対する今後の修理の予定などの説明があり、参加者の活発な質疑とそれに対する説明があった。見学中は、本会会員の多米淑人氏、山田岳晴の日本建築の見方の解説も交えながら和やかに見学することができた。参加者にとって有意義な時間となり、予定時間より1時間弱長く見学会を終了した。終了後は適宜、大安寺境内の福井藩歴代藩主の墓所「千畳敷」を見学し、解散となった。

［山田岳晴／福井大学講師］

講演会「石川県の文化財建造物」

10月9日（土）13:00 ～ 15:00に、「石川県の文化財建造物 金沢における歴史的建造物保存の歩み」と題して、山崎幹泰氏（金沢工業大学教授）による講演会をオンラインにて開催した。講演会には、東京や福井からの参加者も含む計18名が参加した。

金沢は、空襲に遭わずに太平洋戦争の終戦を迎えたものの、戦後は他の地方都市と同様に市街地の再開発が進んできた都市である。山崎氏から、金沢ではどのように歴史的建造物の保存が行われてきたかを時代の流れとともにわかりやすくご説明いただいた。そのなかでは、昭和40年代に、旧第四高等学校の建物が失われる恐れから、建築家・谷口吉郎は土川元夫とともに愛知県に博物館明治村を創設し、一部の教室を移築したことや、同じ頃、オレゴン大学建築学科により幸町の町並み調査が行われ、デザインサーベイの先駆けとなったが、道路の拡幅によりその町並みは失われたことなどが写真とともに説明された。

1975年（昭和50年）の伝統的建造物群保存地区制度の発足に先立ち、東京工業大学平井聖研究室により東茶屋街の調査が行われ、平成の半ばになってようやく同地区が重伝建に選定されたことが紹介され、歴史的建造物の保存までの長い道のりにも言及された。一方で、辰野金吾設計の日本生命金沢支店、W.H.ヴォーリズ設計の大同生命金沢支社など、名建築が次々と失われたことへの問題提起もなされた。また、旧金沢煙草製造所、旧金澤陸軍兵器支廠兵器庫などのレンガ建築が、図書館や博物館などに再生された事例も紹介された。さらに、平成に入ると前金沢市長・山出保のもと、旧町名復活や金沢市民芸術村、金沢職人大学校の創設などが実施されたり、また、北陸新幹線金沢開業を見据え、金沢城公園の整備や近江町市場の再開発などが進められたことや、近況として、昨年、陸軍関係の明治建築2棟を再生した国立工芸館が開館したことなども紹介された。

講演会の様子（Zoom）

講演会の様子

講演の最後には、山崎氏から「昭和40年代に取り組み始めた建築や町並みの保存が、半世紀を経て実を結びつつあるが、コロナ禍の今、歴史的建築をどのように町に活かしていくか、今後のあり方を考えるタイミングに来ている」という今後の歴史的建造物保存のあり方に対する問題提起もなされた。

［宮下智裕／金沢工業大学准教授］

●近畿支部

近代建築見学会および講演会「西脇市立西脇小学校（国指定重要文化財）」

新型コロナウイルス感染症の拡大防止のため、開催中止とした。

●中国支部

講演会・見学会「気候変動から広島の建築・まちづくりを考える」

環境工学委員会と広島市江波山気象館の共催のもと、見学会と講演会を開催した。気候変動が進み、各方面での影響が懸念されるなかで、広島における気候変動の影響の現状を学び、建築・まちづくりでの対応（特に適応）を考える機会とした。また、会場は被爆建物であり重要有形文化財である広島市江波山気象館とし、その解説・見学をあわせて行った。なお、開催日は10月23日（土）であり、参加者は38名であった。

・ 見学会

12:30より、「江波山気象館文化財建物見学会」と題し、広島市江波山気象館・脇阪伯史氏による建物解説の後に見学を行った。なお、新型コロナウイルス感染症の影響に配慮し、見学会は自由見学形式とした。

・ 講演会

講演者には、脇阪伯史氏（前掲）、中山哲士氏（岡山理科大学准教授）、内田龍彦氏（広島大学准教授）、中村好宏氏（広島県環境政策課）、宗像雅充氏（熊野町建設農林部）の計5名をお迎えした。脇阪氏からは、「広島の気候は変わったのか」というタイトルで、気象学の観点から、広島の気候変化についてお話しいただいた。特に、広島の気温上昇は明確で、大雨の回数も増加していることがデータに基づいて示された。中山氏からは、「気象データに見るまちの暑さの変化」というタイトルで、建築環境工学の観点からお話しいただいた。特に、1980年頃からの気温上昇が顕著であることと、熱中症リスクが増加していることなどが示された。内田氏からは、「近年の広島県における洪水被害の特徴と課題」というタイトルで、土木工学（水工学）の観点から、近年の豪雨による水害の状況と、その対策についてお話しいただいた。特に、21世紀に入り水害多発時代になりつつあることが示され、流域視点のまちづくりや構造物設計における洪水対策の必要性が指摘された。中村氏からは、「広島は気候変動とどう向き合うのか」というタイトルで、「広島県地球温暖化防止地域計画」と「広島県気候変動適応計画」をご紹介いただいた。特に緩和と適応の2つの視点の重要性が指摘された。宗像氏からは、「気候変動と向き合う建築（熊野東防災交流センターの事例紹介）」というタイトルで、平成30年7月豪雨の後に、プロポーザル方式による設計者選定を行った「熊野東防災交流センター」の設計プロセスについてご説明いただいた。特に、本センターの設計に際して、いかに今後の豪雨災害の影響を配慮したのかという点についてご説明いただいた。最後にまとめとして、田中より、気候変動の明確さが指摘されるなか、豪雨対策と暑さ対策の両立を実現する、気候変動適応型の建築・まちづくりの必要性について指摘を行った。なお、司会は横山真氏（福山市立大学講師）が務めた。

［田中貴宏／広島大学教授］

●四国支部

講演会・見学会「登録有形文化財建築探訪『西条栄光教会―浦辺鎮太郎が残した形とは』」

西条栄光教会は、戦後間もない1951年（昭和26年）に、当時倉敷レイヨン営繕部に在籍した浦辺鎮太郎が設計した木造のモダニズム教会建築であり、2020年3月に附設の牧師館、幼稚園の改修が完了し、2021年2月には登録有形文化財に登録されている。

今回、当建物の建築史的価値と保存再生状況や登録有形文化財としての価値を改めて考えるとともに、当時の歴史的背景も捉えつつ、浦辺鎮太郎が設計した西条市内の建築物（愛媛民藝館、西条郷土博物館）にも触れながら、西条市のこの地に残した形について考えることを目的に講演会・見学会を実施し、その魅力に直接触れる機会を提供した。

・ 見学会

講演会やパネルディスカッションにつなげるため、参加者には事前に西条栄光教会建築群である「礼拝堂」「牧師館」「幼稚園（外

観のみ)」の3つの建物を見学していただいた。その後、礼拝堂に62名の参加者が集まり、講演会を開催した。

・ 講演会

オンラインで松隈洋氏（京都工芸繊維大学教授）とつなぎ、「浦辺鎮太郎が求めたもの クラフトとインダストリーをつないで」と題して、10年前にこの地を訪れたことを振り返りながら、浦辺鎮太郎が設計に携わった経緯や、当建物が本年で献堂式から70年、浦辺の没後から30年が経つなどの節目を追いつつ、講演は進んだ。

松隈氏は、浦辺鎮太郎の学生時代から今日までを以下の観点から、浦辺が残した言葉を辿りながら、そのなかでの西条栄光教会の位置・意味について展開された。

ー京都帝国大学建築学科に学んでいた時代（1930 ～ 1934年）
ー倉敷絹織の営繕技師として歩み始めて（1934 ～ 1962年）
ー丹下健三の倉敷市庁舎（1960年）をめぐる葛藤
ー営繕技師から建築家への独り立ち、大原總一郎との別れ（1962 ～ 1968年）
ー倉敷アイビースクエアから横浜の仕事へ（1973 ～ 1980年）
ー前川國男（1905 ～ 1986年）という補助線から見えてくること
ー村野藤吾（1891 ～ 1984年）に私淑して
ー浦辺鎮太郎の立ち位置の独自性とは何か
ー日本の近代建築は「内発的」な歩みをしているのか？
ー現代建築の課題とヴァルター・ベンヤミンの言葉

・ パネルディスカッション

「西条栄光教会―浦辺鎮太郎が残した形とは」と題し、コーディネーターに曲田清維氏（愛媛大学名誉教授）、パネリストには松隈氏（前掲）、改修に関わった和田耕一氏（和田建築設計工房代表）、地元より古谷健司氏（西条栄光教会牧師）、真鍋和年氏（愛媛民藝館館長）をお招きし、各氏よりお話をいただくとともに、西条栄光教会建築群の今後についてパネルディスカッションが行われた。

和田氏からは、調査状況や改修状況から、ウィレム・マリヌス・デュドックのモダニズムとのつながりや古きものとの調和について、また、浦辺鎮太郎がこの地に残した作品の大切さや、大原總一郎の民藝を表した作品でもあること、そして、愛媛から始まった浦辺作品はその次の作品へとつながっていることについて解説があった。

古谷氏からは、西条栄光教会とその建物群の今日までの道程についての紹介があった。6年ほど前のこと、日本建築学会の方々からただならぬ建物であるとの話をいただいたことをきっかけに事業が始まり、70年間維持してきた教会関係者の協力や保存資料を紐解きながら、多くの困難を乗り越えて改修にこぎつけたとのお話があった。また、礼拝堂について、今後も皆様からの知恵をお借りし、改修へのご協力をお願いしたいとの要請もあった。

真鍋氏からは、旧西条藩陣屋跡であるこの地について、江戸時代からの成り立ちや西条の景観を代表する人文景観・文化景観として市もこの周辺に予算を投じるなどして残されているものであること、またそのなかで浦辺の建築が中心的役割を果たしていることについてお話があった。また、浦辺鎮太郎が設計した愛媛民藝館の成り立ちや、大原總一郎が西条を視察し、外発的ではあるが民藝協会が設立されたことなども紹介された。

その後の議論では、西条栄光教会の建築群が、都市計画や文化財エリアとして、保存継続がどのようになっていくのか、外発的に始まったこの地をどのようにしていくかなどが追求された。

松隈氏は、西条栄光教会を通して、民藝やモダンデザインの歴史そのものが見えてきて、かつ、その100年の歴史を教えてくれる気がすると述べた。そしてこのことが周知・発信されるならば、営繕技師としても務めた浦辺鎮太郎の全体像が見え、さらには大

見学会の様子

講演会の様子

パネルディスカッションの様子

原總一郎が果たした社会的使命を含め、西条の地ではその歴史的原点に触れることが可能であり、次の時代の若い人たちに多くのことが伝わるのではないか、との期待が寄せられた。

参加された西条の高校生からは、西条栄光教会とそれを取り囲む景観を大切にしていきたいとの心強い言葉もあり、献堂式から70周年の節目を祝しつつ、礼拝堂に会する参加者からの拍手とともに、会は幕を閉じた。今回の開催を通して、西条栄光教会の建築群、特に礼拝堂の改修や今後の方向を考える新たな始まりの一歩が見えた気がした。

［橘亮／日本建築学会四国支部愛媛支所］

●九州支部

見学会「鹿児島麓散歩」

新型コロナウイルス感染症の拡大防止のため、開催中止とした。

第18回中国建築文化賞

令和３年度の中国建築文化賞には、住宅部門１件、意匠部門６件、人物団体部門１件の計８件の応募があり、選考委員会で厳正に審査を行った結果、次の１作品を表彰することに決定しました。表彰作品が表彰規則第１条（目的）における「中国地方の建築文化の発展に顕著な貢献が認められる活動」であり、「広く地域文化の発展と建築文化に対する意識の高揚を図る」作品であることに期待しています。なお、令和３年度の中国建築文化賞の表彰式、受賞者の講演会を以下のように予定しています。

日時：令和４年５月20日（金）　午後
場所：広島県情報プラザ（広島市中区）地下多目的ホール
（同日開催の中国支部総会において。詳細は支部HPでご確認ください）

・ 意匠部門「安芸太田町立戸河内小学校」（広島県安芸太田町）
受賞者：升本　哲（（株）あい設計）

写真１：戸河内小学校・交流ホール（写真提供：升本哲（株）あい設計）

写真２：現地審査時の交流ホール（撮影：中西伸介）

写真３：戸河内小学校・外観（写真提供：升本哲（株）あい設計）

写真４：現地審査時の玄関の大屋根（撮影：中西伸介）

写真５：戸河内小学校・図工室（写真提供：升本哲（株）あい設計）